

『国事詩集』第1巻「政治」部門(2)

The Section of Political Affairs of *Poems on Affairs of State*, Volume 1 (2)

里 麻 静 夫

要 旨

第一節「初めに」では、先ず、王政復古後の17世紀英国の思想・宗教・政治の言説の全体図を示す。次に、当時の風刺の主な手法として対抗言説模倣を挙げ得るが、「偽りの機知」の利用がその模倣の一様式であることを示す。『国事詩集』第1巻「政治部門」収録作品に関しては、反体制派の風刺が政府支持の作品より概して優れている。第二節の作品考察では、先ず、クリストファー・ウェイズ作『予言』を扱う。これは当時数少ない政府擁護の詩であり、英国とオランダの海戦を巡って、筆者の先行論文で扱った反体制派の『画家への第二の助言』に事細かく言い返している。この作品の風刺が成功している面とそうでない面（詩人が途中で占星術より強力な風刺の武器として理性を持ち出すこと等）を論じる。次に、『予言』への応答である『画家への第三の助言』の一部を、『国事詩集』の解説に加えてロングマン版詩集の解説等に依拠しつつ、扱う。この詩には途中で画家への助言からアルベマール夫人に語らせるという構成上の大きな変化があるが、本論考ではその変化が起きる前までを扱う。風刺が成功している個所とそうでない個所を指摘したり、詩法の特徴にどのような意味があるかを論じたりする。

キーワード

クリストファー・ウェイズ、アンドルー・マーヴェル、
王政復古、画家詩、第2次オランダ戦争

I 初めに

本論考は2022年度の中央大学人文科学研所紀要で発表した「『国事詩集』第1巻「政治」部門(1)」の続編である。この先行論文を「論考1」と称する場合がある。又、『国事詩集』第1巻 (*Poems on Affairs of State: Augustan Satirical Verse, 1660-1714* [Yale U. P., 1963]) を「本詩集」とか“POAS 1”と記す場合がある。

本論考がテキストとして用いる『国事詩集』は全7巻であり、その中には名誉革命(1688年)を巡って書かれた作品を収める巻がある。この革命とその前後の時期を扱う日本人研究者達による論集『名誉革命とイギリス文学—新しい言説空間の誕生』が2014年に刊行されている(編者は富樫剛氏で、出版社は春秋社)。これは扱う時期の文学と政治の密接な関係を様々な角度から論じており、全体として大変優れた論集である。この書の帯には「文学史=政治史」という謳い文句があるが、このような問題意識をこの時期の(特に政治が主題の作品の)研究者達は以前から持っている。筆者はかなり前にそのような研究者の何人かの論考を参照して、王政復古後の言説対立の大まかな図式を作ったことがある¹⁾。その図式においては、(1)思想を対立軸として作品を分類すると、(1-1)称賛的で王政主義の言語を用いるものと(1-2)共和主義に立つものとの対立がある。(2)宗教の面では、(2-1)カトリックと(2-2)英国国教会の対立がある。(3)政治の面では、(3-1)宮廷派(the Court Party)と(3-2)地方派(the Country Party)の対立がある。これらの言説対立を(コメントを若干加えて)表示すると、以下のようになる——

(1) 思想 (1-1) 称賛的で王政主義の言語を用いる。	(1) 思想 (1-2) 共和主義思想
----------------------------------	------------------------

<p>王政復古を秩序回復と見るので、後の議會を混沌や言語のバベル的状况であると捉えることになる。本詩集収録の次の作品を参照——『大陪審に対する告発』(<i>A Charge to the Grand Inquest of England</i> [1674年]), 53~55行, 74~86行; 『ウォラー氏の画家が彼に対する新手の多くの助言者に答える』(<i>The Answer of Mr. Waller's Painter to His Many New Advisers</i> [1667年]), 89~90行。</p> <p>復古当初は国王をありのままに描こうとする試みがあった(C. V. Wedgwood, <i>Poetry and Politics under the Stuarts</i>, p. 140: “sustained attempt to praise the king as he really was, not in terms of allegory”)</p> <p>王党派の言論の典型として、前述の『ウォラー氏の画家が……多くの助言者に答える』を挙げ得る。</p>	<p>例えば、本詩集収録のジョン・エイロフ(John Ayloffe)作『ブリタニアとローリー』(<i>Britannia & Raleigh</i> [1674~75年])がその思想を掲げている。</p> <p>法と市民の自由と議會の特権を重んじる。国王や政府寄りの詩から、革命主義(共和主義)と同一視されたりして、激しく攻撃される——(後述の宮廷側の詩クリストファー・ウェイズ(Christopher Wase)作『予言』(<i>Divination</i> [1666年])の157~60行を見よ。</p>
<p>(2) 宗教 (2-1) カトリック</p>	<p>(2) 宗教 (2-2) 英国国教会</p>
<p>(3) 政治 (3-1) 宮廷派 (the Court Party) = 騎士議會 (“the Cavalier Parliament” [Wedgwood, p. 150])</p> <p>議會は、特に1670年代に入ると、国王や政府との対立を深めて行く——『カバルの夢』(<i>The Dream of the Cabal</i> [1672年])の頃から、絶対主義と議會特権の言説の対立が露わになって行くようだ。</p>	<p>(3) 政治 (3-2) 地方派 (the Country Party = 野党 [the Opposition])</p> <p>野党と言っても下院では多数を占めており、カトリック教徒から見れば、非難すべき「体制」である。本詩集収録の『追放された司祭達が下院に別れを告げる』(<i>The Banished Priests' Farewell to the House of Commons</i> [1673年])を見よ。</p>

なお、ウェッジウッドは宮廷詩と風刺の懸隔がチャールズ2世の治世に最大になった、と書いている(Wedgwood, p. 143)。

又、本詩集の「文芸」部門に関する2020年刊の拙論で、当時の風刺の主な手法の一つとして攻撃対象の文体の模倣があり、その手法への言及例としてホップズの『リヴァイアサン』の記述を引いている²⁾。風刺相手の文体の模倣を私は「対抗言説の模倣」と呼んでおり、この手法に関する研究は数多くなされていると思うが、その一つとしてロジャー・D・ランド (Roger D. Lund) の研究書を挙げておきたい。この書は英国オーガスタン期の機知のあり様や用法について論じている。その中で、ホップズは同時代の国教会等の体制を擁護する陣営から、偽りの、或いは反正統的な、或いは自由思想の機知 (false/heterodox/libertine wit) を駆使する危険な理神論者・無神論者の一人と見なされており、彼の言わば悪しき機知に対抗するためには正面切つての論法では効果がないので、彼が用いるのと同種の機知を使う必要が、つまり彼の対抗言説を模倣する必要があった、と述べている。更に、ホップズ等の機智がその本質上曖昧性に富むために、彼等を攻撃するつもりで彼等の機知のパロディーを行ったとしても、件の曖昧性が模倣により体制を守るために風刺する側の作品や論述にも生じて、皮肉なことに当局から反体制的であると誤解されるケース (デフォーのような) があった、とも述べている³⁾。因みに、ホップズと共に本詩集収録作品の詩人達と同じ時代に活躍したジョン・ロックの『人間知性論』には言葉の誤用者としてスコラ派を風刺する個所が数多くある。岩波文庫の翻訳で言うと、例えば第3巻の第10章から第11章にかけて、その風刺を大規模に行っている。そこには昔から諸々の銜学者達が人智増進を妨げて来たことに対する憤りと共に、ロックと同時代の悪しき機知の使用者達に対する憤りも見取れる。しかしそのロックにしても、ホップズと同じく、保守派 (英国国教会護持の立場の人々等) からは理神論であると見られることがあった⁴⁾。

又、ランドの論述から、上述のような偽りの悪しき機知は反理性と見なされることもあり、その限りではポーブが『愚人列伝』 (*The Dunciad* [1728

年、1742年)において糾弾するところの愚人の精神的特性に数えてもおかしくない。ところが、この機知は体制攻撃の有効な手段であり、狂気どころか高度な知性の産物でもある。カトリック教徒という宗教的少数派でありホイッグの大立者ウォルポールに対立する野党の側に立つ局面もあった。ポープもこの(体制側から見て)厄介な機知を駆使する可能性があるだろう。同時に、『愚人列伝』は理神論を社会にとっての最大の脅威と見なしている。こうして見るとこの時代には、相異なる思想信条を持つ人々が同じ機知(この種の機知は用いる本人でさえも制御しきれない曖昧性をその本質としている)を用いて敵の文体を真似つつ攻撃し合う状況——主張の真意や真偽が分りにくい言説の混乱状態——が浮び上がる。

対抗言説の模倣・演技には、攻撃すべき悪の化身的人物に語らせることが含まれる。対抗言説の利用に関しては、本詩集「政治」部門を見る限りでは、野党による風刺の方が政府寄りで反カトリック的であり王党派である風刺よりも巧みであるようだ。野党側風刺の方が、形式上の工夫が豊富でもある。このことは、野党側作品である『王の誓い』(*The King's Vows* [1670年])、『カバルの夢』(*The Dream of the Cabal* [1672年])、『ブリタニアとローリー』と、政府寄り作品である『追放された司祭達……』、『大陪審に対する告発』、『ウォラー氏の画家が……多くの助言者に答える』を比べれば分るだろう。画家への助言詩では、マーヴェル作『画家への第三の助言』(*The Third Advice to a Painter* [1666年])がアルベマール公夫人(the Duchess of Albemarle)に語らせて秀逸である(201~436行)。論考1で論じたマーヴェル作『画家への第二の助言』(*The Second Advice to a Painter* [1666年])とそれへの反論であるウェイズ作『予言』を比べると、後者はより単調である。『第二の助言』以降の画家への助言詩は、体制批判の詩人達が体制賞賛のウォラーの詩を形式ごとに乗っ取った例であり、風刺が攻撃相手のスタイルを模倣することの大規模な例である(この乗っ取りに怒って書かれたのが、『ウォラー氏の

画家が……』である)。J. D. ハント (Hunt) がマーヴェル作『リハーサル散文版』(*The Rehearsal Transpros'd* [1672年]) を引用して指摘する手法も対抗言説模倣を指しているだろう (但し、彼が言う手法は称賛のためのものでもある)⁵⁾。上掲ホゼ (Jose) も風刺対象の手口を真似する手法について言及している——「逆転の手法 (technique of inversion)」(Jose, p. 22, pp. 26-27)。この手法は、『国事詩集』第1巻の政治部門においては、反体制派により多く見られる。王党派の風刺では詩人=語り手が攻撃を行う (二役を兼ねる) ことが多くて、その意味では芸がない。しかし、体制批判の作品であるジョン・フリーク (John Freke) 作『阿呆どもの話』(*The History of Insipids* [1674年]) でも詩人=語り手が一方的に悪態を並べており、単調である。次節において、一つの作品ともう一つの作品の一部についてより詳しい検討を行いたい。

II 「政治」部門収録作品の一部に関する考察

(1) クリストファー・ウェイズ作『予言』

少し前に書いたが、ウェイズの『予言』はマーヴェル作『画家への第二の助言』に対して事細かく言い返している。本詩集の冒頭解説は、この作品は極端に言葉を削っており、意味が通らない場合さえ多いのだが、そうであるのは17世紀前半の風刺観 (であるとウェイズが考えるもの) に基づいているからだ、と述べている。結果として、この詩の文体は粗野で謎めいている (本詩集54ページ)。それに加えて本文には不完全な (corrupt) 部分があるようなので (本詩集55ページ)、分りにくい作品になっているようだ。

ウェイズ (1627~90年 [本詩集は「1625?~90年」とする]) は古典学者であり、論考1で扱った『画家への指示』(*Instructions to a Painter* [1665年]) の作者エドマンド・ウォラー (Edmund Waller) 及び詩人ジョン・デナム (John Denham) の友人である。日記作家ジョン・イーヴェリン (John Evelyn) が第2次オランダ戦争の公式記録の書き手として彼を宮廷に推薦したことが

あるが、実際にはそのイーヴェリンを国王が海戦の記録者に任命した(本詩集54ページ)。このことから、ウェイズが宮廷側の「正史」的観点から海戦を記述すると期待されていたと推測できる。

本詩集解説はウェイズが『第二の助言』に敵意を持つ理由を二つ挙げている——(1)『第二の助言』が自分と同じ王党派である友人デナム作とされたから；(2)ヨーク公爵とクラレンドン内閣に対して反政府的な扇動の攻撃をしていると見たから(同)。(1)に関しては、『第二の助言』は王党派デナムの作とする工作をしてもいるから(本詩集35ページ)、ウェイズのこの怒りはややナイーブではないか？

本詩集解説は又、本作に文学的価値はほとんどないが、以下の理由で本書に収録する意味があると書く——(1)『第二の助言』がデナムの作であることを否定する、初期にして決定的な発言である；(2)この時期としては稀な、クラレンドンが率いる政府を支持する政治的風刺詩の一つである；(3)名前を伏せて政府攻撃を行うことの倫理性について議論している(本詩集54ページ)。(1)に関して、ウェイズは『第二の助言』をバッキンガムが書いたと示唆しているように見える。ここには、友を救いつつ政敵を陥れようとする単純な目論見が透けて見える。(3)からは、この時期に反政府的で匿名の風刺が多かったことが分る。

以下にこの詩の概要を、段(改行で区切られる部分)ごとにまとめて、筆者のコメントを交えつつ記す。段の範囲を示す行番号を太字にして隅付き括弧(【 】)で囲み、その段の概要を(後に)示す。この概要には適宜段を設ける。引用の省略箇所は〔…〕で表す。本詩集の本作への注は、例えば10行目に関するものだと「10行(への)注」とか「10n」のように記す。

【1～8】 作品冒頭で語り手が占星術師ウィリアム・リリー(William Lilly

〔1602～81年〕に呼び掛けている。その中で、『第二の助言』は「上手な絵」であり、カバル（チャールズ2世の政治顧問団）やヨーク公とその夫人を攻撃したりしているが、誰が描いたか知りたいものだ、と語る（4～8行）。

【9～90】 宮廷に悪口を言う連中には私が言い返すから、リリーには星で計算して貰おう。彼は運命の女神からまだ出されていない命令がどのようなものであるかを丸一年前から知っており、世界中の疫病や戦争や〔『第二の助言』という〕邪悪な詩等の出現を説明できる（11～16行）。

17～38行は、『第二の助言』は王と臣民との間に亀裂を生じさせようとしているが、デナム（25～28行）とドライデン（であると思われる人物〔33～35行〕）はそのような悪意とは無縁である、と述べる。ここでは『第二の助言』の正体不明の作者の機知を鬼火にたとえている（“Wildfire of wit”〔17行〕）。そのような機知の持ち主の頭の中に巣食うのは夜の闇とやましい憎悪だけであり、この機知は火球のように飛び散って王と国民の間に割って入って燃え上がり、騒ぎを起すのだ（17～20行）。この邪悪な機知はランドが詳述する悪しき機知（前述）であり、体制擁護派であるウェイズが口にして当然の非難の言辞である。29～32行ではこの機知を憂鬱症（“these vapors of a spleen”〔29行〕）と称して、国家を狂わせる危険なものであると言う。この機知は、ポープが『愚人列伝』で攻撃する愚に通じる。少し後では、この詩人の詩神は（少し後で触れるように）「道から外れている」と書いている（57行）。

39～50行には、注によると、意味不明瞭な点がある（39-40n; 45-46n）。大意は次のようだろう——高位の者を貶めるのが『第二の助言』の目的であるとしたらその作者は二流詩人であろうが（39～42行）、実際にこの作品を見るともっと技量のある詩人の作に思えるので、（ズバズバものを言う〔39～40行への注〕）ウィザー（George Wither）が作者かも知れない；ウォラーやデ

ナム（ウェイズの友人）がこのようなけしからぬ作品の作者であるはずがない。

47～48行はウォラーとデナムは『第二の助言』の詩人のような語り口であるか（いや、そうではない）という主旨である。ここは『第二の助言』335～36行「歴史家というものは甲論乙駁であり、デナムはこう言う——但し、ウォラーはいつもそう言う」を借用している。ここはエヴリマン版では331～32行であり、その版の332行への注は、『第二の助言』の作者がこの詩が当時精神異常であったデナム作であると偽装している、と書く⁶⁾。攻撃対象の文体を（局所的にはあるが）もじって、国王派の立場を強化しようとしている。

52～68行は前の部分と同じ調子で、この詩の悪意はデナムのものではない、彼〔デナム〕の機知と率直さに肩を並べるのはウォラーしかいない、と述べる（52～53行）。これに続く数行はデナムが当時正気を失っていたことに言及している（61n）。脱線気味であるが、自陣強化の一環だろう——ウォラーには友人であるデナムを救ってほしい（55行）——彼が我慢強く黙っていると、デナムの「道から外れている詩神」はあれこれと過ちを犯す（57～58行）；彼は強い知能を持つが、それより強い激情に苛まれると負けるかも知れない——但し、彼が国王への忠誠心を失うことはなかった（61～62行）。

63～68行はデナムの有名な『クーパーの丘』（*Cooper's Hill* [1642年]）からの引用2行——クーパーの丘から流れ出る川の流が深くて広いが清涼であり、うるさく非難することがないという主旨（同作191～92行）——を含む。この引用はデナムの人柄を讃えているわけだが、それに続いてデナムのある歴史劇に言及して、その登場人物が抱く憤激に悪意がないのは件の川のあり様に似ている、と書く（67～68行）。但し、この劇は復讐劇であり陰惨な内容であるから、悪意がない憤激は当てはまらないと思われる。

69～78行は、『第二の助言』作者をデナムと比べて（73～76行）、自分の主人を軽蔑して、人心に取り入って高位の人々を貶める輩であると攻撃する。続く79～84行は真の宝石と偽の宝石（＝『第二の助言』）が輝きを競うと、よりけげばしい輝きの偽物の方が心を迷わせた人々に受け入れられる、しかし、宝石の真質は目利きの人にはすぐ分るものだ、と述べる（83～84行）。84行への注によると、ウェイズは第2代バッキンガム公爵（前述カバルの一員）を『第二の助言』の作者と疑っており、ついでにバッキンガム等の反政府の行動を暗に攻撃している。宝石の真質を見抜く云々は誰でも受け入れる論法だが、ランドが指摘する偽りの機知というレッテルを対立する陣営がそれぞれの敵に貼ろうとする言説混乱の状況下では、このような正攻法の風刺にどれほどの効果があるかは疑問である。

【91～118】 この段では先ず、友や王の悪口ばかり言う奴を知っているか、と占星術師に問う（91～92行）。91行への注によるとウォラーはバッキンガムの旧友だったので、ここは公爵への当てこすりである。95～100行は楽器を戦場へ持って行ったために『第二の助言』で腰抜けとからかわれたサンドウィッチ伯爵を好意的に描く。『第二の助言』101～06行は、オランダ艦隊との海戦でルーパート王子（ジェームズ1世の孫でチャールズ2世の甥）は勇敢に戦おうとしたが、サンドウィッチは古代ギリシアの音楽家アリーオーンの話に倣って楽器を戦艦へ持ち込んだ——その音色が呼び寄せたイルカが、アリーオーンにそうしたように、自分を陸地へ無事に運んでくれるのを望んだからである、と書く。これに反論するウェイズは、アリーオーンの代りにオルペウスを持ち出して、この琴の名手も又海や戦にまつわる様々な苦難を歌ったものだ、船上でサンドウィッチを慰めた楽器は彼の追放先でも彼を慰めた、と書く。敵の文体を真似ている。しかし、サンドウィッチが追放されたのは海軍大将として無能だったからであり、そのこ

とがよく知られている状況では、このパロディーが有効な反撃になっているとは言い難い。

103~04行は、けしからぬ『第二の助言』の作者であろうバッキンガムは個々の司令官ではなく国家そのものを憎むのが仕事である、と書く。続いて、バッキンガムは矛盾の塊であるとして、怪物・危険人物視している(105~08行)。本作品に限らず、攻撃相手をミルトン作『楽園喪失』(*Paradise Lost* [1667年])のサタンに似た矛盾の塊、非人間等として表すことが多い。例えば、本詩集掲載の『閉会』(*On the Prorogation* [1671年])はチャールズ2世による議会休会を非難するが、その中にバッキンガムがプロテウスのように変幻自在であることを糾弾する個所がある。又、同じく本詩集掲載の『大法官の失墜』(*The Downfall of the Chancellor* [1667年])のクラレンドンも同じ扱いを受けている(25行)。このようなカメレオンのように意見を変える人間、アイデンティティのない矛盾の塊のイメージは、やはり本詩集掲載の『カバルの夢』のシャフツベリーにも与えられている(107行)。こうしてみると、雑多性や混沌は自らを正義・誠実・秩序・純粹等の「美德」の側に立たせる者が攻撃相手に張り付ける常套的イメージということになるだろう。これらのイメージは後にポープが『愚人列伝』において三文文士に当てはめるものである。

105~12行の注がドライデン作『アブサロムとアキトフェル』(*Absalom and Achitophel* [1681年])のアキトフェルの人物描写との類似を指摘している。又、この個所には悪人視される人物の一般的特徴を挙げる風刺に加えて、実際のバッキンガムに特殊的に当てはまる点を多く挙げて風刺しているとも指摘している。公爵に対する他の者達の悪口(相対立する国家や信仰を一身に抱え込んでいる変節漢・日和見主義者であるとか、年齢によって全く別人になるとか、エセ学者であるとか)に助けられてか、バッキンガムへの風刺は水準に達している——「[この輩は]自分自身を不和の相手としており、若い時の彼と

年取った彼が／死闘を繰り広げる。宮廷のスパイ、邪悪な顧問、／詭弁を弄する神学者、偽の哲学者——／これら多くのものが一人の人物の中にある、しかも相異なるそれぞれが本当の彼ではない。／この不実な非国教徒の内に相対立する二つの国家と教会が併存している。／[…]/プロメテウスは、鈍い土くれ〔である人間〕に靈感を与えたいと思うと、／空高く上昇して天界の火を持って降りて来る。／ところがこのミケランジェロ〔であるバッキンガム〕は思いとどまらないのだ——絶望を描けるようにと地獄の業火の石炭を取って来ることさえ」（105～16行）。ミケランジェロは『第二の助言』112行で言及されている——詩人が画家に向って、英国艦隊の本格的戦いを描くのはこれからだ、ミケランジェロの『最後の審判』より恐ろしい様相の戦いを描く用意をしろと指示する個所である（109～12行）。但し、ここでのウエイズは同じ画家の名前を出しているだけで、『第二の助言』の文体をもじっているわけではない。

【119～76】 バッキンガムに対する攻撃が続く。119～28行はバッキンガムのクラレンドンへの敵意の表し方が言葉によるものであり、ウエルギリウス作『アイネーイス』におけるトゥルヌスとアエネアースとの体を使う戦いと比べて勇ましくない、などと述べる（125行以降）。そもそも、古代の勇者と比べて小物であるバッキンガムがクラレンドンに放った威勢だけは良い言葉の砲弾は、トゥルヌスがアエネアースに投げつけた石臼と同じで、相手に届かなかったのである（125～28行）。一般的に行われていた古典への言及の手法に助けられてか、ここも風刺としては水準に達している。

続いて、バッキンガムがクラレンドンの何を責めたかを具体的に挙げている——クラレンドンがスコットランドの諸要塞を解体したこと、娘をヨーク公へ嫁がせたこと、ダンケルクを手放したこと、国王を子供ができないキャサリン・オブ・ブラガンサと結婚させたことなどの責任をバッキン

ガムが問うた、と書く(131~34行)。ここについては、131~32行への注が『第二の助言』150行以下の参照を促している。『第二の助言』127行以下はオランダ艦隊との交戦を控えて臆病風に吹かれたヨーク公が戦争の道具が発明されたことを呪う場面だが、その145~54行でヨーク公がクラレンドンを、本作が挙げるのとはほぼ同じ項目に関して非難している。クラレンドンの悪事とされるものは反政府文学にとって好材料だったので、ウェイズとしてはこれらの悪事とされるものが根拠を欠くと言いたいのだ。

続く135~36行に関しては難解であるという注が付いているが、あまりクラレンドンを責めるとお前自身やお前の子の身が危ないぞとバッキンガムを脅しているようだ。そして、137行以下でクラレンドンを弁護しつつ彼の国王への忠誠心を賞賛する(143~48行)。138行ではクラレンドンはアポロンの法廷では無罪であると書く。この行への注は、ここでのアポロンは主として正義を体現するが、予言と詩の庇護者である側面もこの個所に関係すると書く。ということは、ウェイズはクラレンドンの詩才も褒めたいのか。文芸の神アポロンは本詩集の「文芸」部門所収の『詩人達の裁判』(*The Session of the Poets* [1668年])の冒頭にも登場する。そこではアポロンは文芸の裁判長であり、最初に、ヘボ文士達に文芸の栄誉を与えないと宣する。翻ってこの作品ではクラレンドン擁護のために詩神を呼び出しているが、その神がウェイズを三文文士として退けるのは間違いない⁷⁾。

149行以降でもクラレンドン擁護を行っており、彼はヨーク公が傷つかぬように自らを省みず攻撃を一手に引き受けた、いくら誇ろうともヨーク公には通じなかった、などと書く(152行まで)。158~60行では、バッキンガムはクラレンドンの忠誠心を疑問視して、オランダ側の大義に従い、しまいには大内乱(ピューリタン革命)の大義を復活させるかも知れない、と書く。政府批判者とピューリタン革命推進者を結びつけるのは、王党派言説の主要モチーフの一つである。ホゼは157~60行と191~92行(母国の失態を

喜ぶ『第二の助言』の作者のような者を非難する箇所)を引いて、これらの行は以下のような思想を表している、と述べている——国民が政府を批判するのは反逆であり、そのような批判を許しておくについてはピューリタン革命の古い偉大な大義 (the Old Grand Cause) の復活につながりかねない；支配階層の不正や悪政を露見させると社会不安を導きかねないので、何が何でもそのような露見行為を阻止しなければならない (Jose, p. 101)。本詩集掲載の国王派による『ウォラー氏の画家が……多くの助言者に答える』(既出)の39～48行は、王家や高位の人々は神のような存在であるから、彼等を軽蔑するのは神聖を汚す行為であるとして、支配者の超越性を言い募っている。これは王党派の主張の本質であり、ウェイズの主張もその線に沿っている。

161～76行では、国王は残念ながら我々の存在をご存知ないので、(本来そうすべきなのに)我々を重用することはないが、我々こそ揺らぐ王座を支えるべく生まれてきた者である、と言う。

【177～246】 それに続く177行以下はバッキンガムを更に攻撃している——彼の顔も手も相が歪んでおり、表情はころころ変わるが、リリーであれば彼の心が読めるだろう (177～78行)；彼が笑顔なのはフランスから秘密裏に年金を貰っているからではないか (181～82行)；彼のあの皺はオランダに有利な和平を彼が結ぼうとしていることと関係しているのではないか (183～84行)。

この中で、179～80行は直訳すると「〔バッキンガムの〕あの笑顔は／彼の国に関係するのか、或いはウィリアム様の島 (“Sir William's Isle”) に関係するのか？」となるが、180の注は何に言及しているのか説明できないとしている。「ウィリアム様の島」が何を指すか不明であるということだろう。この詩発表時の1667年を含む1650～72年にオランダには総督不在だが、そ

の前後にウィレム2世と3世が総督になっているので、「ウィリアム様の島」はバッキンガムの裏切り等によりオランダに支配されるようになった英国という意味かも知れない。この辺りは、どこかから借りて来た要素や趣向に助けられていることはなくて、風刺として水準に達している。

この後、占いの主体が変わる。185～86行でバッキンガムが英国を愛するので母国の窮状に眉をひそめているとリリーが言うが私は納得しないと書き、187～88行でリリーに向かって占いの道具を壊せ、「正しい理性が〔お前より〕良い判断を下すのだ」(188行)、と続けるのだ。187～88行に関しては注が、細かい意味は不明だがウェイズがリリーよりも「正しい理性」の方を選んでいることは明らかである、と書く。ここでリリーを退けるのは唐突に思えるが、理性を占星術よりも確かな道具として持ち出すことにより自分の立場が正しいことをより強く主張しようとしているのだろう。タンブルソンという研究者が宗教改革時から改革者側が「理性」をカトリックの「迷信」(と考えられるもの)に対立させて来ており、英国国教会もその論法でカトリック信者や国教反対者を攻撃した局面があったことなどを示している⁸⁾。ウェイズの理性依拠もその流れに沿うものだろう。自分達の信仰にのみ理性を帰属させて他宗教を非理性として排する乱暴なやり方を歴史的状況が許していたわけだが、ここで理性を前面に出すことが、先述のように相対立する陣営が悪しき偽の理性を有効な武器として盛んにやり合っている状況の下でどれほど風刺としての効果を高めているか疑問である。ここで理性を持ち出してもウェイズが望むほどの威力はなくて、むしろ彼の体制擁護論にナイーブな面があることを示しているのではないか。因みに、この作品に対する応答である『画家への第三の助言』では(「応答」であることに関しては後述)、詩人が途中で画家に筆を止めさせて、アルバマール夫人に語らせる。筆者としてはこのような構成上の変化を『第三の助言』の作者がウェイズを真似て設けているとまでは言わないが、どちらの

作品も風刺の効果を高めるつもりで同種の工夫をしていることは確かである。

続いて、前述のように、189～92行で母国の失態を喜ぶ『第二の助言』の作者及び彼のような人間を非難する。195～99行では同じく英国側の損害を風刺の格好の種にすることの非を唱える。205行以下でも、外国との戦や和平について知ったようなことを書く風刺家を攻撃している。そのような輩がオランダ側を利すると言いたいのだ。

そのオランダを213～32行が、諸国の富を略奪する民であるなどと決めつけて、攻撃している。この個所は、後へ行くに従って、誹謗と中傷の度を増す——「この国は諸領域から奪ったもので膨張している。／ある国からものを買ってそこに飢饉を起させることも、反対に売って飢饉を起させることもできる。／〔海面下の土地が多いという国土〕自然の欠陥を技術で補っている。／不毛なくせに世界の市場である。／〔…〕／〔…〕／ここの赤子達は流れ下るラインへ投げ入れられて／（この川は本来のオランダの範囲を限定しているのだが）、／船室で誕生して、大洋で成長して、／水の平原を縦横無尽にさまよって、／海を行く馬車で対蹠地へと至る。／オランダ人は海の〔凶暴な〕タタール族であり、／利益を得る必要に迫られるとその族に劣らず残忍になり、／艦隊から略奪したり、土地に生えているものを全て引っこ抜いたりする。／古くからの友好関係をないがしろにするのは、今や裕福で強力になったからだ。／いくら幸福であってももの足りない——自分達だけが幸福でない限りは」（217～32行）。論考1で紹介した小野氏の指摘——復古期風刺においては誹謗・中傷との区別が付けにくい場合があるという指摘——がこの個所にも当てはまる⁹⁾。オランダに対する敵意が英国に蔓延していたので、その雰囲気助けられて悪口が滑らかになっているようだ。

この段の最後の233～46行は、偉大な海洋国家であるポルトガルと英国が

オランダを利する計略にまんまと乗ってしまった、この二国は世界貿易の場から締め出される寸前の状態に陥っている、と書く(243~46行)。英国が対外情勢により経済危機に陥っていることを指摘して、そのような時に政府を批判することの愚を強調したいのだろう。

【247~60】 247~48行は、「腹黒いセイレーン」(247行)である『第二の助言』作者がその詩のエンヴォイで王や議会に対して「耳に心地良いまじない」(同)を發して彼等の怒りを解こうと考えているのか、と問う。勿論、そのような甘言の真意を自分は見抜いているぞ、と言いたいのだ。論考1で指摘済みだが、『第二の助言』のエンヴォイ「国王へ」(345~68行)はチャールズ2世の治世を称えながらも、彼の周囲のクラレンドン等の亡国の徒を抑えよと忠告する。但し、この国王称賛は多分にポーズである——この頃既にチャールズは頼りないというイメージが定着しつつあり、国王自身への反感が直接表現されるのは時間の問題だったからである。それ故に、このような時期に国王とその政府の擁護を試みるウエイズの分は悪いと言える。

251~60行では、国王はオランダのように海外進出したくない(251~52行)、英国海軍が勝利をおさめていないのにイギリス海峡とアイリッシュ海を勇ましく航行して、敵方の妨害で半分しか荷を積んでいない武装商戦を護送するのがはたして良いのか(253~56行)、などと問う。これらの問いは皮肉を込めて「偉大な政治家」(253行)と称するバッキンガムに向けられており、英国海軍が積極的にオランダ海軍を打ち破るべしという彼の主張に異議を唱えている。

【261~86〔作品末尾〕】 最後の段は先ず『第二の助言』作者に向って、概ねこう語る——英国の宮廷が(やることが)気に食わないのなら、そこを離

れて、どこかの国の王を責めれば良い（261～62行）；英国人はとても鈍い気風なのでお前の立派な助言をちゃんと理解できないし、世が認めるお前の価値に報いることもできない；ここ英国で軽んじられるお前の賢い言葉を「西方の強大な君主」（266行）に向けてはどうか；或いは、自分はオランダ人に好意を持つと宣言してはどうか（261～70行）。皮肉を込めて、バッキンガムの意見など英国には不要である、と述べている。「西方の……君主」はフランスのルイ14世を指す（266行の注）。「お前の価値に報いる」（264行）は原文では“on thy [...] worth requite”であり、注はrequiteを「復讐する」と解している。しかし筆者は、上記のように意味を取った。

271～78行に関して注は、絶望的に不完全であるとする。筆者なりに意味を推測すると、大体次のようになるだろう——バッキンガムが自分には罪がないと勝手に裁定しようとも、世界中の何千もの船がオランダへ向ったり〔デンマークの〕シェラン島へ向ったりしようとも、フランスがオランダの仲間になったりオランダがデンマークの仲間になったりしようとも、世界中の国が中立を維持したり他国と組んだりしようとも（英国もその例外ではない）、高慢なオランダは彼等が不当に扱った人々のせいで突然打倒されるのだ。

この個所は、残りの部分（279～86行〔作品最終行〕）と相俟って、強国の運命などはかないものだという感慨を述べているように思える——それらの国々が奸智によって又は富によって繁栄してもむなしだろう；正義の女神アストライアーが、彼女の天秤にかけて、諸国の盛衰を決めるのだ；オランダは軍備や同盟や国土防御の体制を強化しようとしているが、女神の天秤に平和と通商の諸法をかけた方がより安全になるだろう。バッキンガムの海戦に関する助言は結局意味をなさない、と言いたいのだ。無常観による締めくくりはよく行われるが、ここではそれなりの説得力がある。

(2) アンドルー・マーヴェル作『画家への第三の助言』(*The Third Advice to a Painter* [1666年])

次に、本詩集がマーヴェル作として納める『画家への第三の助言』を検討したい¹⁰⁾。字数の都合上、詩の構成上大きな変化を画するアルベマール公爵夫人の語りが始まる前までを扱う。『第二の助言』と同じで、H. M. マーゴリアスのオックスフォード大学版と主としてそれに基づく吉村伸夫氏の邦訳詩集には収められていない。本詩集編者であるロード編のエヴリマン版には収められている。2007年刊のナイジェル・スミス編の詩集には『画家への第二の助言』と共に載っている¹¹⁾。マーヴェルが、野党の立場から、1666年6月の「四日戦争」での英国海軍の失態を描く。カバルの有力メンバーであるアーリントン(Arlington)伯爵とコヴェントリー(Sir William Coventry)にその失態の主な責任があるが、マンク(Monck)即ちアルベマール(Albemarle)公爵にも責任があるとする。

論考1で『第二の助言』について行ったように、先ず本巻解説(67~68ページ)のポイントを示す——サンドウィッチ更迭後、アルベマール侯爵になっているマンクとルーパート王子が海軍を共同で指揮することになった；1666年5月にルーパートが率いる艦隊が、ビスケー湾のベル・イルの近くにいると報告があったドゥ・ボーファート(de Beaufort)が率いるフランスの軍艦を攻撃するために派遣された；残りの英国艦隊でアルベマールは、優勢なオランダ艦隊と遭遇した；そこで始まった「四日戦争」でアルベマールの艦隊は全滅の危機に遭ったが、ルーパートの艦隊が土壇場で加勢したために、全滅を免れた；英国艦隊のこのような分割が議会により調査されたが(1667年10月)、この時丁度下院がクラレンドン弾劾の方法を探っていた；最近の研究によると、艦隊を分割して全滅させそうになった責任は主として共同司令官(=アルベマールとルーパート)にあった；そこから考えられるのは、これらの司令官が、艦隊全滅の危機の責任を逃れるために、

大蔵卿（＝クラレンドン）弾劾の急先鋒たるコヴェントリーとアーリントン伯爵に非を負わせようとしたクラレンドンと組んだということである；司令官達は、アーリントンの情報部が、ドゥ・ボーファートのフランス艦隊が実際は地中海にいたのに、バル・イルにいると嘘の報告をした、その報告を受けた自分達はオランダ艦隊が戦闘態勢を整えていたことを知り得なかった、と証言した；彼等は又、コヴェントリーがルーパートを呼び戻すための命令を急送しなかった、と証言した；上述の研究によると、これらの申し立ては虚偽であり、アルベマールがルーパート艦隊抜きで強力なオランダ艦隊と交戦したのは意図的だった；この作品はアーリントン伯爵とコヴェントリーを主犯としてこの犯罪（＝艦隊を全滅の危機に晒したこと）への関わりを示唆するが、アルベマールにも責任の一端がありとする——劣勢なのに無謀にもオランダ軍に戦いを挑んだ、と言うのだ（筆者付記——本作128行では「彼の向こう見ず極まりない戦い」と書いている）。

次に、やはり論考1と同様に、スミス編詩集の解説（スミス、344～46ページ）のポイントを、本詩集の解説を補うと思われるところを中心に紹介したい。先ず「情況」という節で、この詩が前述の四日戦争（1666年7月1～4日）についてのものであることを述べてから、この海戦の経緯を示す（スミス、344～45ページ）。その経緯は本詩集解説と大体同じ内容である。加えて、アルベマール公爵夫人に語らせる形で海戦における失敗と失政を非難している、と説明する（スミス、346ページ）。又、海戦の場では戦う気のある英国兵がいなかった、戦死者の多くは強制徴募された時の服装のままだった、とも書く（同）。それほど間に合わせの戦力だったのだ。オランダはこの海戦で優位だったことを誇ったが、それを受けて英国では、自国の言い分を最大限言い募る文書が色々とお出された（同）。本詩集解説はウエイズの詩が政府支持の稀な作品であるとしているが（前述）、詩以外に目を向ければ、政府側に立つ言論もある程度の数があったということになろう。も

ちろん体制批判陣営にとってこれらの公式文書は言わば大本営発表的なものであり、信憑性に欠けていた。

この詩はウェイズの『予言』に対する応答(前述)でもあり、ウェイズがあれこれと海軍や政府を非難しているのを「たしなめているように見える」(スミス, 345ページ)。政府公認の諸記述は、四日戦争における英国側の武勇を強調することで、英国の勝利を示唆している(同)。そのような公式文書の一つ『国王陛下の艦隊とオランダ艦隊との交戦の真説』(*A True Narrative of the Engagement between his Majesties Fleet, and that of Holland* [1666年])では、海軍総司令官マンクが語っているかのような体裁である。それに対して、『第三の助言』では総司令官の妻アルベマール夫人が「真実」を語る(同)。筆者の見るところ、このような「真実」の取り合いで何が本当の話かよく分らなくなるわけだが、この現象は本詩集において作品同士の関係からよく生じるものである。

『第三の助言』は込み入ったやり方でクラレンドンと長老派をからかっているが、侯爵夫人もクラレンドンと同じ長老派であった(スミス, 345ページ)。夫人はさもしさに加えて公金横領でも評判が悪かったので、彼女が政府と海軍は廉直であるとあれこれ唱えても、偽善と捉えられたばかりか信じられなかっただろう(同)。ある研究者は、マーヴェルが予言者としてありそうもない人物を選んだのは悲惨な国情を指摘するためだった、と言う(同)。

次に「構造、文体、詩法」という節で、先ず、画家詩の慣習に則って細密画家ギブソン(後述)が絵を描いていると想定しているが、その画家に助言するという流れが169行で唐突に途切れてアルベマール公爵夫人が導入される、と説明する(スミス, 345ページ)。そして、夫人の語りは *parrhesia* の例であるとするある研究を紹介する(同)。筆者がウィキペディアで調べてみると、*parrhesia*「パレーシア」はギリシア語で「包み隠さず話すこと

(の許しを得ること)」であり、「言論の自由だけでなく、危険を冒してでも公益のために真理を話す義務をも意味する」(ウィキペディアの記述を一部変えた)。スミスが紹介する研究では、パレーシアは権力の座にない者が危機に対処して自由に話すことである(スミス, 345ページ)。夫人は古典の予言者に擬せられているが、真に靈感を受けた女性予言者と言うよりはむしろ「腹話術師」(“engastrimyth”)のように性格づけられている(同)。engastrimythはオックスフォード英語辞典第2版(OED2)によると、ギリシア語で「腹で話しているように見える者、腹話術師」を意味する。OED2は例文を四つ示しているが、最初の例文は「激怒して」、二つ目と三つ目の例文では「取りつかれて或いは狂気で」腹から声を出しているように見える者という意味であり、感情的で本当のことを言わない者とされる例の方が多い。本作でもその意味だろう(OED2の記述の提示とそれに基づく推測は筆者による)。又、夫人の話しぶりには卑しい身分にふさわしいものが多くある(スミス, 346ページ)。彼女が不平を言う時、長老派詩人口パート・ワイルドの民衆の言葉遣いを採用している——ワイルドの『北風の道』(論考1で扱った)の口調を反映しているのだ(同)。夫人の声は更にマンクへの称賛に見られる以下の様式を組み入れている——(1)英雄詩様式；(2)民衆のパラッドの様式(同)。夫人は長老派であり、非国教徒と緊密に協力していた。その非国教徒をマーヴェルが1670年代の散文で擁護することになる(同)。因みに、ロード編のエヴリマン版詩集の解題では語りのお大半を夫人に割り当てることについて、これが画家詩への新要素の導入であるとした上で、こう記している——この趣向によりマーヴェルは、日和見主義で陰險な政治家達を批判している；彼等は長老派のマンクを恐れながらも彼を利用せざるを得なかった；彼等は、同時に、公爵の向こう見ずな虚勢と彼の妻が出自が卑しく、粗野であることを暴露せざるを得なかった；この手法を取ることで [=夫人に多く語らせることによって]、人物描写の均整が減多にない

ほど取れている；風刺が不屈の指導者〔である公爵〕に対する尊敬の念を消し去ってはいないのだ¹²⁾；事情は、粗雑で無作法な夫人に関しても同様である（ロード、130ページ）。夫人の語りを画家詩の新要素として付加しただけでも、詩人（彼がマーヴェルか否かは別として）の功績は大きい。

以下にこの詩の概要を、段（改行で区切られる部分）ごとにまとめて、筆者のコメントを交えつつ記す。注に関しては、本詩集によるもの以外は主にスミス版に拠った。複数の段をまとめて扱う場合がある。その場合、「【段の行番号】／【段の行番号】」のように示す。段がスミス版と違う時は、スミス版段番号を「スミス版【段番号】」のように示す。スミス版の段を複数まとめて扱う場合は、本詩集と同じやり方で、「スミス版【段の行番号】／スミス版【段の行番号】」のように示す。本詩集とスミス版の段が同じである時は、段の行番号のみ示す。段の範囲を示す行番号を太字にして隅付き括弧（【 】）で囲み、その段の概要を（後に）示す。この概要にはコロン（:）を用いて適宜段を設ける。それらの（下位区分の）段の範囲は、例えば、1～10行であれば「1～10:」のように記す。それらの段をまとめて扱う場合は、例えば「1～10:概要（+筆者のコメント）／11～20:概要（+筆者のコメント）」のように示す。段の中の文及び引用の省略箇所は〔…〕で表す。本詩集の本作への注は、例えば10行目に関するものだと「10行目（への）注」のように記す。スミス編詩集の注は「スミス10行目（への）注」、本詩集編者であるロードが編集したエヴェリマン版詩集の注は「ロード10行目（への）注」のように記す。

【1～10】

冒頭の概要： ローストフト海戦失態を受けてサンドウィッチとヨークが海軍を率いなくなったので、彼等の後継將軍達を描くのに新しい画家の腕を試そう。／3～10行： リーリーはオランダ人なので、彼に描かせて

オランダに情報が漏れるとまずい；代りに細密画家のギブソンを招き入れて、四日戦争の顛末を描かせよう。

リーリー又はレリ (Sir Peter Lely [1618~80年]) はオランダからイングランドに渡った画家である。ギブソン (Richard Gibson [1615~90年]) はリーリーの作品の模写もした (10行目への注, スミス5行目への注)。

【11~30】

11行以下の概要： 先ず、ジョージ〔・マンク〕とルーパートを描いてくれ；この二人が一緒になってホランド〔=オランダ〕を鎮圧する唯一の魔法だったのに、結局これらの海軍大將は無能だった。／19~23行： だから次は、この二匹の猟犬を引き離した方が良い——二人でいても駄目なのだから。

詩人はこう言ってから、四日戦争の顛末を以下に示す。ここでは艦隊分割の愚を示唆している。11~12行ではマンクとルーパートを一つのさい筒に入っているサイコロにたとえて、それらがガラガラと立てる音が遠くまで聞こえた、と書いている。スミスの12行目への注は、このたとえは戦争がギャンブルのようなものであることを意味する、と書く。勝敗は時の運であり、その分むなしい行為であるという気持ちを込めている。加えて、うるさい音を出すサイコロである彼等の虚勢を示唆している。このたとえは巧みである。

23行以下の概要： ルーパートが襲おうとしたフランス艦隊司令官ドゥ・ボーファートの艦隊はまだ〔地中海の〕ツーロンにいるのに、ルーパートが彼と大西洋のビスケー湾で戦えるとは、何という摂理であることか (~28行)。／29~30行の概要： 四日戦争の凶兆を私 (=詩人) は見た。ここは、ルーパートがフランス艦隊の所在を勘違いしたことがきっかけになっ

た英国側の失態を皮肉っている。凶兆云々は、そもそもこの戦を行うべきではなかったと言いたいのだろう。

【31～42】

概要： 将軍アルベマールが若さに任せて勇名を馳せようとするあまり、強大なオランダ軍に単独でぶつかる過ちを犯した；アルベマールは公爵になった今、ジェントルマンのマンクだった時よりも武功を挙げたいと思ったのだ；しかし、彼はマンクだった昔の方が武勇に優れていたことがほとんど分っていないかった。

【43～70】／スミス版 【43～50】／スミス版 【51～64】／スミス版 【65～70】

43～49行の概要： オランダの提督ロイテル (de Ruyter) が、アルベマールを阻止すべく、強大な敵として現れる；ロイテルがアルベマールにオランダを征服するつもりかと問い、それならば自分がアルベマールの「北風 (*Iter Boreare*) を押し返してみせよう」(48行)、と言う。

北風はスコットランドからロンドンへ進軍したマンク＝アルベマール公を指しており、論考1で取り上げたワイルドの王政復古を祝う詩の題名でもある。ここにはマンクによる王政復古に対する貢献を帳消しにしたいという詩人の気持ちが表れている。

57～70行の概要： マンクが自分の艦隊だけで突撃して、激戦が始まる；彼の砲火はヤマアラシの逆立つ毛に似ている (58行)；彼は危険を遊び相手にして、彼が放つ砲弾はピンボールの玉のようだ (59～60行)；彼の砲撃は雷鳴のように轟いた (62行)。

海戦を描くのにとえを多用しており、アルベマールの勇ましさを語ると同時に、叙事詩の壮大な効果を狙っている部分がある。これはもちろん、

素直にアルバマールを讃えているのではなくて、彼の無謀を強調するためのものだ。雷鳴のたとえが平凡すぎるのは、詩人の腕が悪いか、敢えて平凡に書いて海戦の価値が小さいことを示唆しているかのどちらかだろう。

69～70行は「運命の神が息を引き取れば、マンクに代りを務めさせろ。／彼の大砲が相手の生死を決めるのだ」とアルバマールの勇ましさを追加して描くが、彼を神の次元に引き上げるのはその描写と彼の実像との落差が大きいことを示唆するためだ。運命の女神を導入する個所にもたとえば使われている——「〔海戦の音に〕聞き耳を立てる大気は遠くの陸地へ、／秘密の笛で運ぶ——交戦の調子の取れた轟を。／その轟の木霊が消えて行くときに、人々は聞こえない音を感じるのだ——まるで運命神の脈動のように」（65～68行）。この個所は詩として優れていると思うが、その調子の高まりが翻ってアルバマールに対する、延いては政府に対する風刺の効果が増していることを意味する。

【71～80】

71～80行の概要： オランダ軍が英国軍になかなか有効打を与えないのを見て、勝利の女神がオランダ軍の味方をしようとする；彼女はロイテルに英国軍を攻めるコツを教える——「彼等の弱点を見つけてやろう、アキレスの踵のような弱点を」（80行）。

女神がオランダに味方をするのは、アルバマールが発するような「大言壮語を常に嫌い、／戦場で勇ましい者は彼女の兵士であるが、技に優れる者が彼女の恋人である」（71～72行）からだ。古代の叙事詩みたいに神が人間の戦いに直接関わっているが、これも又実際の海戦が叙事詩的内実に欠けることを示唆する。

【81～94】／【95～104】／スミス版 【81～104】

81行以下の概要： 神助を得たオランダ軍の有効な攻撃で英国軍が大打撃を被った(81～88行)；それでも、アルベマールにとどめを刺すには至らなかった(89～92行)；ついに英国軍が退却を決意する(93～94行)。

前述スミスの解説が本作はアルベマール夫人に語らせることでアルベマールに対する尊敬の念を消し去っていないとしているが、彼の妻の語りが始まる前のこの個所でも、公爵の勇ましさを英国艦隊がそれなりに頑張ったことをストレートに語っている。敵の攻撃で動けなくなったアルベマールの艦を猟師に撃たれて落ちる鳥にたとえ(87～87行)、その後にはマンクがまだ意気盛んであると書き(89～90行)、続いて彼をニューフィールドの野で撃たれてもおお猟師と戦おうとする野ガンにたとえている(91～92行)。但し、一般的と個別的(英国の具体的な土地の鳥)のちがいはあれ鳥のたとえをこのように続けるのはぎこちないので、マンクを称賛する体で貶める効果を少し減じているのではないか？

95～104の概要： 英国軍の敗走に際してアルベマールが憤った様子を描くと良い、と助言する。ここでは色々な人物を列挙して、彼等の憤りなどアルベマール等指揮官達のそれに比べれば軽いものだ、と書く(103行まで)。対照として挙げられる人物の中で不当に罵られる有徳の士(97行)や上手なのにやじられて舞台を降りる役者(99～100行)等は普遍性が高いが、「オリヴァー〔・クロムウエル〕或いはマンクに退去させられた残部議会の面々」(102行)は時事的である。詩人の党派性が露わになっている。

【105～30】／スミス版 【105～22】／スミス版 【123～30】

105～30行の概要： 英国軍が負けたさまは描かないでくれと言いながら、幾つかの恥ずかしい事態を示している；本当の話であったとしても描かな

いでくれ——戦死したファルマス伯パークリー (William Berkley, Earl of Falmouth) の死体は恐怖のあまり石化して像になっていたの、オランダ側が防腐処置をしたり、英国側が持ち帰って墓に入れたりする手間がなかったくらいであったことを (110~14行)；自船を座礁させてオランダ軍に捕まったエイスキュー (Ayscue) のみっともなさは暗い雲で隠してくれ (119~22行)；なかんずく、アルベマールの不名誉な傷については手や指を描くにとどめて、尻は描かない方がよい (124~26行)；彼の負傷は無分別な戦をしたことへの天罰だったのではないか (127~28行)；残部議会がマンクの負傷を知っていたとしたら、〔戦闘神〕マルスがやっと〔議会を解散した〕彼に復讐してくれたと言ったことだろう (129~30行)。

専ら英国側の失態を描かせようとするこの辺りではたとえばあまり使われておらず、事実(とされるもの)をストレートに皮肉な口調で語っている。残部議会云々も反王党派的感情の率直な表明である。

【131~42】

概要： 前段に続いて画家に、英国軍が長時間損害を被った様子 (“the long disaster” [131行]) を詳しく描かぬよう勧めている；139行以降では、ルーバートの遅すぎた到着を語る；ルーバートの艦隊も形勢逆転を達成することができなかった (139~42行)。

この段では神話・伝承への言及が復活している。まず、描くのは「クジラの腹の中にいたヨナ〔ヘブライの預言者〕だけで良い」、と言う (132行)。ヨナが大魚に3日間呑み込まれていたことは、その間英国側が苦戦したことを指すのだろう。予言者は神命で大魚から吐き出されて死を免れた。海戦では、後出のように (143~62行の段において)、言わば神風が吹いて英国艦隊は全滅を免れた。ヨナのたとえで英国側が決定的に敗北したわけではないように見せろと助言しているわけだが、実のところ英国側は大損害を

被ったのだと言いたいのだろう。しかし、このたとえは迂遠である。

次に、「それから描け、若々しいペルセウスが大急ぎなのを、／慎み深い乙女を海獣から救うために」(133～34行)、と言う。ルーパートをペルセウスにたとえて(スミス130行注)、彼がアンドロメデー即ちアルバマールの艦隊を救うために急いだことを描けと言うのだが、そのゼウスの子はペーガソスに乗っていないのでスピードが足らず、ゴルゴーン即ち敵を石に変えるメドゥーサの首を盾にしていなかったので力不足だった(135～36行)。

ルーパートは神話の英雄にたとえられているが、ペルセウスが持つはずの天馬もメドゥーサの首という最強の武器も欠いているので、彼は未完成の英雄ということになる。彼が「若々しい」と形容されることについて、133行注は彼が当時47歳だったと記す。詩人としては、この王子は結構な年齢になっても若い時の性急さが治っていないと示唆したいのだろう。この神話利用によって英国側のヘマが一層際立つ仕掛けになっており、機知が効いている。

【143～62】

143～62行の概要：ルーパートの本隊がやって来たが、手酷い打撃を受ける；運よく霧が英国艦隊とオランダ艦隊の間に割り込んだので、やっとオランダ軍の攻撃から逃れることができた(153～58行)；英国軍が全滅を免れたのが全くの自然の働きであることを強調して(159～62行)、英国軍の作戦の失敗の重大さを語る。

この段もたとえで始まる。グリーンランドの船乗り達が酷寒の夜をやり過ごして日がまた昇るのに大喜びする、或いは彼等の翌年の船隊を陸から見つけて大喜びしてクジラ漁がまた豊漁になるのを願う、そういう時よりもアルバマールの艦隊がルーパート隊を見た時の喜びの方が大きかった、と書くのだ(143～50行)。翌年の豊漁云々は、次戦での勝利を期すという意

味である。スミスはグリーンランドの厳しい夜の描写がミルトンの『失樂園』第3巻のある個所の表現を借りていると注記している（144～45行注）。かつて共和体制を熱烈に支持していた詩人の作品から国王支持の詩人が借用することは、『失樂園』の詩としての力が党派性を超えたところにあったことの証かも知れない。

ルーパートがオランダ側を攻撃する様もたとえて書く——風が穏やかな海に襲い掛かるのよりも激しく襲い掛かった（151～54行）；しかし、ルーパートの艦はあつという間に無力化されて、それは手首に傷を負った者が剣を落すようだった（155～56行）。上述の霧（原文は「雲」〔157行〕）が幸いに立ち込めたことに関しては、ホメロスでさえ彼が詩に書いた英雄達を救うためにこれほど上手に霧を使ったことはない、と書く（159～60行）。これらのたとえと比較は、これまでの幾つかの個所と同じく、叙事詩的描写と現実の海戦の内実との落差を狙ったものである。

【163～68】

概要： 海戦が終り、官報が偽りの戦勝の報を流すと、国民が熱狂する；しかし、その「偽りの炎」をロンドン大火の「本物の炎」が「消す」ことになる（168行）。詩人は海戦の結果に関する政府の情報操作を見抜き、それを打破して見せる。四日戦争は6月上旬にあったが、同じ年の9月上旬にロンドン大火があった。たまたま海戦の後に生じた大火事と偽情報で燃え上がった偽りの感情の炎とを対比するのは巧みである。大火を引き起した天の怒りが国民を騙そうとする政府に向えば良いのにといい思いを表している。

注

- 1) N. Jose, *Ideas of the Restoration in English Literature, 1660-71* (Macmillan, 1984), pp. 22ff.; Warren L. Chernaik, *The Poet's Time: Politics and Religion in the Work of Andrew Marvell* (Cambridge University Press, 1983); C. V. Wedgwood, *Poetry and Politics under the Stuarts* (Cambridge U. P., 1961), p. 150.
- 2) 里麻静夫「『国事詩集』を読む—第1巻「文芸」部門に於ける愚人像(2)一」(中央大学英米文学会『英語英米文学』第60集〔2020年〕, 3ページ)。水田洋=訳『リヴァイアサン』(岩波文庫改訳版, 1992年), 第1巻, 156ページ。
- 3) Roger D. Lund, *Ridicule, Religion and the Politics of Wit in Augustan England* (Routledge, 2016), chap. 1, chap. 5.
- 4) ジョン・ロック=著/大槻春彦=訳『人間知性論』(三)(岩波文庫第4刷, 岩波書店, 2006年)。ロックにおける理性の位置づけと彼を理神論者と見る向きについては, 同文庫の解説に加えて, 以下の書の序文と第1部及び第2部を参照されたい—— R. D. Lund (ed.), *The Margins of Orthodoxy: Heterodox Writing and Cultural Response, 1660-1750* (Cambridge U. P., 1995).
- 5) J. D. Hunt, *Andrew Marvell: His Life and Writings* (Paul Elek, 1978), p. 156: “making the same thing serve for a Panegyric or a Philippic”.
- 6) George deF. Lord (ed.), *Andrew Marvell: The Complete Poems* (David Campbell Publishers Ltd., 1993)。ロングマン版は本詩集と同じ行である—— Nigel Smith (ed.), *The Poems of Andrew Marvell*, revised edition (Routledge, 2013).
- 7) 『詩人達の裁判』に関しては拙論「『国事詩集』を読む—第1巻「文芸」部門に於ける愚人像(1)一」(中央大学英米文学会『英語英米文学』第59集〔2019年〕)を参照されたい。
- 8) R. D. Tumbleson, *Catholicism in the English Protestant Imagination: Nationalism, Religion, and Literature 1660-1745* (Cambridge U. P., 1998), chap 4: “Reason and religion”: the science of Anglicanism,” et passim.
- 9) 小野功生「王政復古の文学」—喜志哲雄=監修/圓月勝博・佐々木和貴・末廣幹・南隆太=編『イギリス王政復古演劇案内』(松柏社, 2009年)。
- 10) この詩に関する論述は, 中央大学人文科学研究会公開研究会(2017年1月28日)での発表に一部基づく。
- 11) *The Poems and Letters of Andrew Marvell, Vol. 1. Poems* (3rd ed.), ed. H. M. Margoliouth (Oxford U. P., 1971). *Andrew Marvell: The Complete Poems*, ed. G.

deF. Lord (Everyman's Library, 1984). *The Poems of Andrew Marvell* (Revised ed.), ed. N. Smith (Routledge, 2007). 吉村伸夫=訳『マーヴェル詩集』(山口書店, 1989年)。

- 12) 429~37行でアルベマール夫人が、夫がロンドン大火の処理に尽力したと称えている。本詩集413~20行への注を見ても、大火からの復興に際してアルベマールが実際に尽力したことが分る。政府を批判する立場の詩人にしても、アルベマールのこの功績は否定できなかつたはずだ。